

# 無口な上司が本気になったら

*Sawa & Yuya*

---

加地アヤメ

*Ayame Kaji*



エタニティ文庫

## 目次

無口な上司が本気になったら

5

無口な上司は年下の恋人にご執心

293

書き下ろし番外編

結婚してもブレない暮林優弥

323

無口な上司が本気になったら

## プロローグ

——あー、今日もよく働いた。

時刻は夜の十時過ぎ。一日中歩き回って脚が棒のように重かった。

こんな日は、お気に入りのバスソルトを入れた湯船に浸かって、のんびりしたい。

そんなことを思いながら、マンションのドアを開け家の中に入る。

私、小菅佐羽、二十八歳。イベントの企画会社に勤務するOLだ。

マンションで同棲中の恋人、瀬多洋一は二歳年上のサラリーマン。彼とは付き合い始めて二年、同棲してもうすぐ一年になる。お互いすっかり気心も知れていて、このままいけば結婚するのかな、なんて漠然と思っていた。

「洋一? ……まだ帰ってないのかな」

てつきり洋一が先に帰っているものと思いついていたのだが、家の中は真つ暗だった。声をかけながら廊下を進む。いつもと同じ我が家なのに、何故か違和感を抱く。

胸騒ぎを覚えつつ部屋に足を踏み入れた私は、ダイニングテーブルの上に置かれた小

さな書き置きに気がついた。

見覚えのある筆跡で書かれた短い文章。

【別れてください。今までありがとう。さようなら】

内容を脳が理解するまで、一分はかかったんじゃないだろうか。

「別れ……え——っ!?!」

衝撃の内容に手が震える。そしてその後にくく一文に、私の体をさらなる衝撃が走った。

【電子レンジとテレビだけもらっています】

ハッとして、周囲に目をやると——無い!

かつてそれらが置かれていた場所は、すっぽりと切り取られたかのように、もぬけの殻だ。

「ハア——!?!」

な、なんでよりによってこのチョイスで持ってくるの——っ!?!

テレビだけならまだしも、毎日食事の支度で相当お世話になっている電子レンジを持つていかれたのは、私にとってかなりの痛手だ。

「よ、洋一……」

衝撃のあまり立っていられず、私はその場にへたり込む。

さつきまでは、仕事も恋も順調！なんて思っていたのに、まさかいきなりこんな目に遭うなんて。

予想外のショックな出来事にしばらくの間メモを手にしたまま、立ち上がることができなかつた。

しかし、どんなに落ち込んでもショックなことがあっても、変わらず朝はやって来る。翌日、私は目覚めてすぐにテレビと電子レンジがあった場所に目をやり、ぽっかりと空いた空間を確認して大きなため息をついた。

——あああ……やっぱり夢じゃなかったんだ。

どうにか体を動かして身支度を整えた私は、最悪の状態で出勤する羽目になった。

私が勤務するS・T企画はイベントの企画制作運営や、企業のセールスプロモーションなどを請け負う会社である。新卒採用から六年。様々な部署を経て三年前から今のイベント事業部企画課に在籍していた。社員の平均年齢は三十代半ば。年の近い社員が多く、人間関係も円滑なため、私はこの職場を非常に気に入っている。

今の私の肩書きはイベントプランナー。主な業務はイベントの企画を提案し実行することだ。

我が社の請け負うイベントは実に様々で、スポーツやエンターテインメント系、季節

のイベントから地域イベント。規模も大きいものから小さいものまでいろいろある。

私達プランナーは、クライアントの要望に応じて企画案を作成し、まずは社内コンペに出す。そこで案が通り、クライアントがGOを出せば企画を進められるのだ。

この部署に配属になって三年目の私は、ここ最近ようやく自分の企画が採用されるようになった。今はとにかくイベントのことを考えるのが楽しくて、寝ても覚めても仕事のことばかり考える毎日を過ごしていた。なのに……

——ダメだ、全然アイデアが浮かばない……!!

パソコンのモニターを前にして頭を抱える。今日はまったくと言っていいほど何も浮かんでこない。

これは絶対、昨日のアレのせいだ。

彼氏に振られたショックも、家電を持って行かれたショックももちろんある。

だけど、それより何より、二十八歳にもなって、彼氏に無言で出て行かれる私ってどーなの!? というショックが一番大きかった。

もしかして私、自分でも気づかないうちに彼に何かしてしまったんだろうか。そのせいで洋一は、私の顔などもう見たくないと思えばかりに黙って出て行った……? 考えた末に行き着いた答えに、気持ちにはさらに落ち込むばかり。

モニターを見つめたまま魂が体から抜け出そうになっていると「小菅」と私を呼ぶ

上司の声が聞こえた。

「は……はいっ」

振り返るとそこには、私の直属の上司である入江課長がいた。

「カフカ・クリエイトの新商品プロモーションの企画書、出してないのお前だけだぞ」

指摘されてハツとする。カレンダーをチェックすると確かに今日が締め切りだ。私は慌てて机の上にくいつか重ねてあった資料の山から、その企画の資料を取り出した。

「すみません、今日中には必ず！」

「今日の十六時まで、時間厳守な」

「はいっ」

ああもう、ダメダメ！ しつかりしなきゃ！

なんとか集中力を高めて、資料を片手に一心不乱にキーボードを叩き続けた。どうか企画書を仕上げたところで時計を見ると、もうお昼。ちょうど、いつも一緒にランチを取る同僚の渡辺京子が声をかけてきた。同い年の京子は、可愛らしい顔立ちで性格は穏やか。入社以来ずっと仲良くしている友人だ。

「佐羽、お昼だけど」

「あ、うん……行こうか」

昼食が入ったミニトートを手にし、京子と共に休憩スペースへ移動する。

我が社に社員食堂は無いのだが、フロアの一角に社員用の広い休憩スペースが設けられていた。コーヒー、紅茶、お茶やハーブティーなど、無料の飲み物が多数取り揃えられていて、ランダムに置かれた丸いテーブルでお茶を飲みながら昼食を取る社員が多い。空いている席に着いてすぐ、通りかかった先輩社員の敦賀みなみさんが、私達のテーブルの横で立ち止まった。みなみさんははつきりとした顔立ちの美女で、性格は竹を割ったようにあっさりさっぱり。言うなれば企画課の頼れるお姉さんという位置づけの人。

「あら珍しい。佐羽、いつものお弁当はどうしたの、寝坊でもした？」

「うっ……」

何気ない先輩の指摘に、言葉に詰まってしまふ。

ここ一年くらい、私は毎朝洋一のお弁当を作っていた。そのついでに自分の分も作っていたから、毎日弁当持参で出勤していたのだ。でも今日、私の手元にあるのは出勤途中に購入したコンビニのサンドイッチ。

「ねえ、何かあった？ 今日佐羽、なんかおかしいよ？ 朝からため息ばかりついて、ぼーっとしてるし」

私の顔を窺いながら京子が口を開く。それを聞いたみなみさんも、神妙な顔で私を見つめてくる。

そんなに態度に出ていたのかと、自分のふがいなさにさらに落ち込む。だが、私の答えをじっと待っている友人や先輩に、これ以上黙っていることはできなかった。「じ……実は昨日、一緒に住んでた彼氏が置き手紙だけ残していなくなったの……」それを聞いた京子は絶句し、みなさんの眉間には皺が寄った。

「いなくなつたつて、出て行つたつてこと？」

みなさんに聞かれて、私は大きく頷いた。

「……たぶん。彼の荷物と、彼と折半で買った家電がなくなつてたし……」

「家電！ 何持つて行かれたの？」

立て続けに問うみなさんに、私はハア、と大きなため息をついた。

「テレビと電子レンジです……」

みなさんの眉間の皺がさらに深くなった。

「それは痛いわね……。で、なんでそんなことになつたわけ？」

私達の隣に腰掛けたみなさんは、タイトスカートから伸びる綺麗な脚を組む。完全に聞く態勢に入っていて、真剣な顔で私の言葉を待っている。

一人で抱えているより、誰かに聞いてもらった方が気持ちが落ち着くかもしれない。そう思った私は、モヤモヤした心の内を口に出した。

「それが全然分らないんです。昨日の朝まで普通に顔を合わせていたのに、いきなり

こんなことになつて……。理由が知りたいのは私の方ですよ」

確かにここ数ヶ月、私も洋一も忙しくて、一緒に住んでいながらゆっくり話す時間がほとんど無かつた。当然、デートらしいデートも夜のアレもない。だけどそういつたことがなくても理解し合えていると思つていた。でも、そう思つていたのは私だけで、彼は違つたということなのだろうか。

「相手に連絡は？」

みなさんに聞かれ、私は小さく首を振つた。

「着信拒否されてるみたいで、繋がらないんです……」

そう。昨夜、放心状態から覚めた私は、とりあえず洋一に連絡をした。だけど何度電話をかけても彼には繋がらず、メールも返ってきてしまふ。着信拒否をされているのだと気がついた時は、冷や水を頭からぶっかけられたようだった。

このことに私はかなりのダメージを受けている。

私の何が別れを決めるほど嫌だったのか、洋一の気持ちが知りたいのに、それすら分からぬのだ。

「せめて最後に少しでも話し合えていたら、こんなモヤモヤした気持ちを引きずらずに済んだんですけど……」

私が正直な気持ちを吐露すると、ずっと何かを考えていた京子が口を開いた。

「佐羽の彼氏って婚活イベントで知り合ったって言ってた人……?」

「あれ……そういえば佐羽って今、婚活イベントの担当してなかったっけ?」  
 言ってから、みなみさんがしまった、という顔をする。

「はは……」

乾いた笑みを零して、私は項垂れた。

今、私が関わっている企画の一つに、複数の企業で共催する婚活イベントがある。

独身の男性社員のために出会いの場を、という目的で行われるそのイベントは、コンペを経て我が社が企画運営を請け負うことになった。

これまで様々なイベントを企画運営してきたけど、うちの会社で婚活イベントを扱うのは今回が初。そのため婚活イベントに参加経験のある私が、企画提案だけでなく運営にも関わることになったのだ。

「私、なんでこのタイミングで婚活イベントに関わってしまったんでしょう……」

昨日まで、この婚活イベントにかなりの力を入れていたのに、今の私はちつとも心が動かない。おかげで仕事にも集中できず午前中は散々だったのだ。

がっくり肩を落とす私に、みなみさんが「まあまあ」と私の頭を撫でた。

「代われるものなら代わってあげたいけど、私も今、手一杯だからな」  
 申し訳ない、と言いたげに目を伏せるみなみさんに、慌てて手を振る。

「だ、大丈夫ですよ、午後には復活しますから……」

「無理しなくたっていいのよ!? 愚痴でも飲みでも付き合うから、いつでも言ってる?」

強がる私の手を握り、みなみさんが励ましてくれる。その横で京子もこっくりと頷いた。

「私も、いつでも話を聞くから。まずはしっかりとご飯食べて、元気出そう?」

「うう……ありがとね……」

優しい先輩と友人に、感謝しかない。

なんとか気持ち切り替えて、今は与えられた仕事に徹しよう。そう思いながら昼食を終えて、自席に着いた。

黙って私のもとを去る男なんて、もう忘れよう。

こういう時こそ仕事よ。仕事のことだけ考えるんだ。

私は、例の婚活イベントのために集めておいた資料を手取る。そこには婚活イベントで知り合い、結婚することが決まった参加者達の幸せ溢れるコメントが書かれていた。それらに目を通しているうちに、だんだん胃をぎゅーっと掴まれるような感覚に陥る。理想の人に出会えた、同じ価値観で話が合う、一緒に居ると幸せ、という感謝や喜びの言葉は、今の私を惨めにさせるばかり。

——あー!! もうダメだ!! 今は他人の幸せな未来なんて応援できない!



気持ちに限界を迎えた私は、耐え切れずに定時で会社を後にした。

胸に消化しきれないモヤモヤしたものを抱えながら、重い足取りで帰路に就く。

とはいえ、このまま家に戻っても、気を紛らわせるためのテレビもなければ、食事の手助けをしてくれる電子レンジもない。これじゃあ、また洋一のことを思い出して暗くなるだけだ。

——よし、何か美味しいものを食べよう！

そう決意した時、近くにあるパティスリーのショッパバッグを持った女性とすれ違う。その瞬間、私の中で食べたものが決まった。

——こういう時こそ、思い切った気分転換が必要だもんね。

私は近くのパティスリーに向かって歩き出した。

美しいケーキが並ぶそのパティスリーは、会社から近く白い外壁が印象的な店だ。数年前に開店して以来、外観の美しさと、それに負けないケーキの美味しさでOLを中心に絶大な人気がある。

いつもは選ぶのを躊躇する高カロリーのケーキ達。けど、今日は太るとか、そういったことは一切気にしない！

店に飛び込み、真っ直ぐ奥のイートインスペースへ向かう。メニューを吟味し、直ぐさまオーダーを済ませた。

ケーキが届く前に、肩すれすれの長さのボブヘアをシユシユで纏める。そして数分後、臨戦態勢の私の前に運ばれてきた煌びやかなケーキ達。その数、五個。

「す、て、き……！！」

思わず、ケーキを見つめてうっとりする。

色とりどりのフルーツがたっぷり載ったタルトに、ピスタチオの緑色が鮮やかなムース、王道中の王道イチゴのショートケーキに、国産栗をふんだんに使ったモンブラン。そして生クリームを添えた濃厚ガトーショコラ。

普段こんななケーキを食べることはまずない。だけど今日は特別。大好きなケーキをお腹いっぱい食べて、嫌なことを忘れるのだ！

「いただきます！」

ケーキを前に両手を合わせて、私はフォークを手にとった。

まずは大好きなフルーツのタルトを口に運ぶ。食べた瞬間、瑞々しいフルーツの酸味と、タルトの香ばしさが口いっぱい広がる。

——美味しい。めっちゃ美味しい……！！

私は感動しながら黙々とケーキを口に運んだ。

美味しいケーキを食べてすぐ幸せなのに、思い出したくもない洋一のとことが、まるで走馬灯のように頭の中を駆け巡っていく。

たまに喧嘩もしたけど、私達は上手うまくいつている——そんな風に思っていたのは私だけだった。

そう思ったら、せつなくて悲しくて涙が出てくる。

——洋一め……なんで、なんで何も言わずに出てったのよ……！ そんなことされても傷つかない、鉄の心臓を持つ女とでも思ってたわけ？ 残念でした、めちゃくちゃ傷ついています！

毗まじりに溜まる涙を手の甲で拭ぬぐいつつケーキを黙々と食べる。そのうち悲しさを通り越して、腹が立ってきた。元カレへの怒りを食欲に変え、目の前のケーキを平らげていく。今日は運がいいのかイトインスペースには私しかない。なので周囲を気にせず泣きながら一心不乱にケーキを喰くひ食はう。するとアラ不思議。五個もあつたケーキがあつという間に消えていった。

そうして全てのケーキを食べ終えた私は、放心状態でぼんやり天井を見つめる。

——食べた……意外といけるもんだな……あと二個くらいならいけるかも。

思う存分、泣いて腹を立てたお陰か、気持ちが大分落ち着いた。冷静さが戻ってきた分、自分の状況が少し恥はずかしくなり、ナプキンで素早く涙を拭ぬぐ。今更ながらに周囲を見回した私は、ドキッとして固まった。

何故なら、ショーケースの前に立っている男性が、私を見ていることに気づいたから。

眼鏡をかけた背の高い男性は、シヨップのペーパーバッグを手にしたままこちらを見つめている。

——……ちよつと待って。ま、まさか、あの人……

私が息を呑んだのと、買い物を終えたその人がこちらに歩き出したのはほぼ同時。

「お、お疲れ様です」

私は慌てて立ち上がり、男性に向かって一礼した。

まさかこんなところで会社の上司に遭遇するなんて！

男性は私の顔を見ると、「やつぱり」と言つて、その形のいい口元を微かすかに緩ゆるめた。

彼の名は暮林優弥くばりゆうや。私と同じ会社に勤務するイベントプロデューサーである。

「お疲れ様、小菅さん。奇遇だね」

「お、お買い物、ですか」

「うん。ちよつと手土産てみやげをね。小菅さんは……お茶？」

暮林さんの視線が私の前にあるお皿そばに注そそがれる。そこには、五個のケーキを食べ尽くした跡が。

上司にやけ食いを見られていたことに、愕然がくぜんとする。

「よく食べるね。ケーキ好きなの？」

「い、いえ、いつもこんなに食べるわけでは……」

やってしまった感が否めず、彼の視線から逃げるように俯く。そんな私を見て暮林さんがフツ、と笑ったのが分かった。

「ぜひ、いろいろ聞きたいところだけど、残念なことに今日は約束があるんだよね」

そう言って、暮林さんが一歩歩み寄り、私の耳元に顔を近づける。

「また今度ゆっくり話しましょう、小菅佐羽さん」

低く、ビリビリと腰に響きそうない声と、耳にかかる吐息についギャツと叫びそうになった。

「はっ、はい……」

何故フルネーム？ と動揺した私はこう返すのが精一杯。

暮林さんは微かに微笑み、軽く手を上げて店を出て行く。彼の姿が見えなくなると同時に、私は席に座り込んだ。

——あれ、暮林さんだよね……？ なんかないとも違わなかった……？

暮林さんは、私より七つ年上の三十五歳。

会社では無口であまり表情を変えない目立たない人、というのが社員の抱く彼の印象だったりする。ただビロデューサーとしては相当できる人で、名指しで仕事の依頼が入るくらいすごい人だ。

そんな暮林さんは、新入社員研修の時の、私の直属の上司だった。彼の下で働いた期

間は短かったけど、不慣れな新入社員の私に対して、口数は少ないながらも丁寧に接してくれた。そのことは、入社六年目の今でもよく覚えている。

少し長めの前髪がかかる黒フレームの眼鏡をかけた暮林さんは、百六十センチの私が見上げるほど背が高い。それでいて、ほんの少し猫背気味だったりする。愛煙家らしく、通り過ぎる時にふわりと煙草の匂いをさせていた。

これは私の主観だけど、眼鏡の奥の目はとても綺麗なアーモンド型で、顔もかなり整っていると思う。年齢よりも若く見えるし、初めて彼を見た時などは背の高さとスマートな体型から、女性にモテそうな人だと感じた。つまり、暮林さんはかなりのイケメンなのだ。

だけど私の持つ印象と、他の女性社員が持つ印象は違ったらしい。

仕事は抜群にできるが必要なこと以外あまり話さないし、話しても盛り上がらない。

しかも暮林さんは飲み会への参加もほとんどない。自然と女性社員達は、とっつきにくくて苦手だと彼を敬遠するようになっていた。

そんな暮林さんは、数年前に関西支社に異動になり、つい二ヶ月ほど前に元々いた関東支社に戻ってきたばかりだ。

——よりよって暮林さんにこんなところを見られるなんて。

無駄無くスムーズな仕事ぶりで定評のある暮林さんは、私のようなひよっこプラン

ナーからすれば憧れの存在。そんな憧れの人にこのようなみっともない姿を晒してしまつたことに、私はがつくりと肩を落とす。

後から思えばここで彼に遭遇したのは、運命だったのかもしれない。

しかしながらこの時の私は、そんな運命など、まったくもって知るよしもなかったのだ。

## 一

その翌週の金曜日、私は直属の上司である入江さんと二人でミーティングルームにいた。

入江課長は四十代半ば。仕事に対して厳しい人ではあるが、とても面倒見がよく、明るい性格で社員から慕われている。だけど、今日の入江さんは椅子に腰掛けて眉間に深く皺を刻んでいた。その明らか不機嫌顔に、私は縮こまるしかない。

「先日提出してもらつた小菅の企画案、全然ダメだ。お前、あの内容で本当に勝負できると思つて提出したのか？」

「そ、それは……」

ぼんやりしたまま期限を迎え、とりあえず纏めて提出した企画案は、案の定ボツ。

企画課に配属されて三年。ようやく自分の企画が採用されるようになってきた。入江さんにも期待してもらつていたのに、不十分な状態のものを出してしまった自分に、申し訳なさが募る。

視線を落とした私を見て、入江さんが大きなため息をついた。

「小菅、お前最近なんか変だぞ。今回の件もそうだけど、このところ勤務中にため息ついたりぼーっとしたり、全然集中できてない。こんなこと、今までのお前にはなかったことだ」

全部見られている、そう思った私は反射的に頭を下げた。

「申し訳ありません……！ 以後、このようなことがないように気を引き締めます……！」

必死の思いで訴えると、入江さんが再びため息をつく。

「お前、何か悩んでいるのか？ 俺で力になれるならいつでも相談に乗るから、言ってみろ」

おずおずと顔を上げた私を見て、入江さんが心配そうに尋ねてきた。

「……いえ、あの……大丈夫です、本当に」

そう言いつつ、実際、私は落ち込んだ気持ちを、なかなか上昇させることができずに

いる。

そのせいもあって最近は何もよく眠れず、集中力が落ちているのを自分でも感じていた。でも入江さんに心配されるほどひどいとなると、さすがにマズイ。

「ちよつと最近、寝不足気味で、でも、しっかり寝てすぐに復活します」

さすがに本当のことを言う訳にはいかないので、無理矢理笑みを浮かべた。そんな私を見て、入江さんもようやく表情を緩める。

「そうか。ならいいんだが、無理はするなよ？」

「はい、ありがとうございます」

「じゃあ、これは返す。きちんと反省して次に活かすように」

優しい声音でポツになった企画書を手渡され、チクツと胸に痛みが走った。

期待を裏切ってしまったのは私なのに、こうして氣遣ってもらっている。反省と共に、このままではダメだと強く思った。

「本当にすみませんでした！ 失礼します」

一礼してからミーティングルームのドアを開けると、ちよつとドアの前にいた暮林さんに遭遇した。この前のことがあったせいか、目が合った瞬間気まぎらくなって、つい彼から視線を逸らしてしまう。

「ああ、打ち合わせ中にごめん。入江さんいる？」

にこつと笑った暮林さんが尋ねてくる。

「はい、中に。ど、どうぞ」

素早くドアから離れて道を譲ると、彼は「悪いね」と言っただけで私の肩をポン、と叩いてミーティングルームに入っていった。

「……な、なんだろう今の。こんなこと今までされたことないのに……暮林さんってこんなキャラだったっけ？」

首を傾げながら自分の席に座り、キーボードに手を載せる。

たちまち、さっきの入江さんの言葉が頭に浮かんで、自分のふがいなさに項垂れた。

やらなければいけないことはたくさんあるのに、いつまでもプライベートなことを引きずって、私、本当に何やってるんだろう。こんなんじゃない入江さんに注意されるのも当然だ。

——って言うてもなあ……

私の今のメイン業務は、先日企画が採用された婚活イベント。このイベントは、工業団地にある企業の男性従業員に出会いの場を、という目的で開催が決定した。このイベントをきっかけに普段あまり接点がない異性と出会い、人生のパートナーとなる相手を見つけよう、という明るい未来に向けた企画なのだ。

しかし私ときたら、そういうイベントで出会った同棲中の彼に三十手前で出て行か

れ、未来に夢も希望も抱けないという状況。

イベントのことを考えれば考えるほど、夢と現実のギャップに空しくなってくる。しかもこの空しさは、彼がいなくなったことに対してではなく、いなくなったことによつて明らかになった事実に対して、だ。

私は彼と付き合っている間、彼女としての役割をきちんと果たしているつもりでいた。洋一のことが好きだったし、彼とはそのうち結婚するだろうと思っていたから。

でもこうなってみて、最初こそショックだったけど、追いつがって復縁を望むほど彼のが好きかというのと、そうでもないことに気づいてしまった。

それどころか、今となれば、本当に彼と結婚したかったのかも疑問に感じる。

どっちかという電子レンジとテレビを持って行かれたショックの方が大きいという事実に、我ながら愕然としてしまった。

心にも懐にも大きなダメージを負い、もう頭の中がごっちゃごちゃで最悪な気分だったりする。

二年も付き合った相手をちゃんと愛することもできなかった自分が、他人様の恋の成就を願ひ叶えるイベントを企画できるのかという迷いもあり、仕事がちつとも捗らないのだ。

——ダメだダメだ、これは仕事。自分のことなんて今は関係ない。せつかく私の企画

を推してくれた入江課長の期待を裏切るような真似は、もうしたくないし。

コーヒーでも飲んで気合を入れよう。そう思つて、私は休憩スペースに向かった。

南向きの大きな窓から光が差し込む休憩スペースは、明るいグリーンと白の二色に塗られた壁に囲まれ、その一角にドリンクサーバーやコーヒーマシンが置かれている。社員はこれを自由に飲むことができ、社員からの評判も上々だ。私もよく利用しかなり重宝している。

私のお目当てのコーヒーマシンに近づくと、その前に一人佇む先客の姿があった。

少し猫背気味の、白いシャツに黒のスラックス姿。後ろ姿だけで分かる、暮林さんだ。また遭遇してしまった。かといって引き返すのも、と考えた結果、勇気を出して声をかける。

「お疲れ様です」

私の声に振り返った彼は、コーヒーを手にしたままフワリと微笑んだ。

「よく会うね」

そうですねと返すが、どうにも顔が引き攣つて自然に笑えない。

彼が少し横によけてくれたので、私はその空いたスペースに体を割り込ませ、置いてあったカップにコーヒーを注ぐ。その間、何故か暮林さんは黙って私の横に立っていた。コーヒーは淹れ終えたはずなのに、どうして彼はこの場を離れないのだろうか？

そんな風に思っていると、不意に声をかけられた。

「どう、最近」

「えっ、あつ？ 最近ですか？ まあ、ぼちぼちですね……」

私は暮林さんから視線を逸らし、淹れたばかりのコーヒーに口を付けた。

「そう？ ここ最近の小菅さん、ちよっと元気がないように見えるから」

その言葉にチラツと彼を見上げると、私に意味ありげな視線を送ってくる。

これは、もしかしてこの間のやけ食いのことを指してる？

「そ、そんなに元気がないように見えますかね……？」

恐る恐る尋ねると、即、返事が返ってきた。

「うん。表情が暗い」

今の私ってそんな風に見えるのか。

無自覚に態度に出して周囲に心配をかけ、仕事も中途半端。本当にダメダメだな、今の私。

この仕事はずっとやりたかったことなから、もつとちゃんとしなきゃ。

自分の中ではつっきりと意識を切り替え、ぐっと顔を上げた。

「……ご心配いただいてすみません。実は、私生活でちよっといろいろありまして。でも大丈夫です。これからは心機一転、バリバリ仕事を頑張りますので！」

努めて明るく振る舞ったつもりなのだが、私を見る暮林さんの表情は微妙なまま。これはきつと無理をしていると思われているな。

「入江さんにそのこと話したの？」

「いえ……」

小さく首を振る私を、暮林さんはじっと見つめてくる。

「今のままじゃ、頑張っても作業進まないでしょ。まずは集中できない原因をどうにかするのが先決じゃない？」

その正論すぎる指摘に言葉に詰まる。なんだか彼の下で研修を受けていた頃のような気持ちになり、視線を落とした。

「小菅さん、この後暇？」

何も答えられずにいる私に、暮林さんが尋ねてきた。

「いえ、まだやらなければいけないことが……」

ぼかんとする私を置き去りに、暮林さんは時計に目をやる。

「時間も時間だし、メシ行こうか」

「ええっ!? なんで……」

思いがけない提案に動揺して声がうわずつてしまう。ちなみに入社して以来、暮林さんと二人で食事をしたことなどない。だけど暮林さんの表情はいつも通りだ。

「入江さんよりは俺の方がまだ年も近いし、今は仕事にもあまり絡んでない。だから私生活のいろいろも話しやすいんじゃない？」

と言つて、私の顔を覗き込みニコツと微笑んだ。

確かに入江さんには恋愛の話なんて言いにくい、つていうか言いたくない。だからつて、何故暮林さんに？

大体、彼は顧客から指名で依頼が来るほどの売れっ子プロデューサーだ。そんな忙しい人がなんでわざわざ私の話なんて……

ここでハツとする。もしかして暮林さん、さつき入江さんに何か言われたのだからうか？

そんなことを考えている間に、暮林さんは飲み終えたコーヒーカーップを片付け、おもむろに私の腕を掴んだ。

「考える時間があるくらいなら、さつきと行こう」

「えっ、あの、ちょ、暮林さん！」

まだ行くと返事をしたわけではないのに、暮林さんは私の腕を掴んだまま歩き出してしまふ。

「はつきり言おうか」

「え？」

「ケーキのやけ食いするくらい、腹の立つことがあったんでしょ」

「うっ……！」

暮林さんが振り向きざまにニヤツと笑う。その顔を見たらもう弁解する気も起きなかつた。

「……分かりました。すぐ用意します」

私が頷くと、暮林さんは余裕の笑みを浮かべる。

「廊下で待ってる」

そう言つて、私の腕を離して自分の席に向かつて歩き出した。

——暮林さんの言う通り今のままでは仕事<sup>はかど</sup>が捗らないのも確かだ。それに、彼にはすでにみつともないところを見られて……この際、全部吐き出してみるのもいいかもしれない。

私は急いで帰り支度をして部署を出る。廊下では、鞆<sup>かばん</sup>を持った暮林さんが私のことを待っていた。

「じゃ、行こうか」

「はい……」

歩きながら、まだ困惑している自分がある。なんでこんなことになったのか、自分でも状況がよく呑み込めない。



彼の後について、暮林さんの行きつけだという焼き鳥屋の暖簾のれんをくぐった。香ばしい匂いが充満した店内は、カウンターと四人がけのテーブル席が四つだけで、私達がカウンターの端の席に着くと店内は満席になった。初めて来た店だけど、建物のレトロな感じとか、優しいような店主の笑顔が持てる。

「いい感じのお店ですね。よくいらっしやるんですか」

「たまにね。気に入ってもらえてよかった。何食べる？」

彼にクリアケースに入ったメニューを手渡され、それをざっと見て注文を決めた。

「じゃあ焼き鳥の盛り合わせと、唐揚げとトマトのサラダを」

「飲み物は」

「えっと……レモンサワーで」

お酒を飲もうかどうか一瞬迷ったけど、ま、いいか。飲んじゃおう。

「了解。じゃ、俺はウーロン茶で」

それを聞いて慌てて彼を見る。

「ええっ!? く、暮林さんアルコール飲まないんですか? じゃあ私も……」

「いって。君はアルコールが入った方が話しやすいでしょ」

焦る私を見て暮林さんが笑う。

「す、すみません……」

カウンター越しに飲み物を手渡され、そのグラスを私の前に置いた暮林さんは、ウーロン茶の入ったグラスを「お疲れ」と私に向かって小さく掲かかげた。

「お疲れ様です……」

彼に倣ならって私も同じように掲かかげてからグラスに口をつける。

暮林さんが飲まないのに私だけ飲んでいいものかと悩みどころではあるのだが。

それにしても……暮林さんとうこうして肩が触れるくらいの距離で食事をするなんて変な感じ。

右隣でメニューをチェックしている暮林さんをチラリと盗み見る。

眼鏡にかかる前髪が、野暮ったく見えるような気がしないでもないけど、相変わずとても綺麗な横顔。暮林さんって肌が綺麗で若々しいんだよね。たぶん二十代って言っても通用するんじゃないだろうか。

——そういえば、暮林さんって彼女とかいるのかな。そんな噂一度も聞いたことないけど……

そんなことを考えていたら、私の目の前にサラダと、焼き鳥の盛り合わせが置かれた。「どうぞ。食べて」

同時に暮林さんの前にも盛り合わせが置かれたので、私はカウンターのケースから箸はし

を取り、まず彼に手渡す。

「ありがとう」

「いえ。いただきます」

そう言って、ぺこりと一礼する。

「で、何があったの」

いきなりすぎて、口に入れたばかりのトマトでむせそうになった。私は慌てて、おしぼりで口元を押さえる。

「……っ、と、唐突ですわね」

「それを解決するために誘ったんだから、当然。入江さんも心配してる」

「やっぱり、課長に頼まれたんですわね」

だよ。そうでもなきや暮林さんが私を誘うなんて、ありえないよ。

「それもあるけど、この前あんな場面に遭遇したからね。泣きながら無表情でケーキを食べてる小菅さんは、なかなかインパクトがあったから」

その時のことを思い出したのか、暮林さんが苦笑する。

恥ずかしさに俯き、私は急激に火照る顔を両手で押さえた。

「勘弁してくださいよ……」

「いつもと違う小菅さんがずっと気になってるね。入江さんを口実にこうやって誘い出

したわけだよ」

砂肝が刺さっていた串を木製の串入れに入れてから、暮林さんが腕を組んで私を見る。

ここにきて、私は言葉にするのを躊躇う。

「……聞いても楽しくないと思いますけど」

「それはなんとなく分かってる」

観念した私は、軽く息を吐いてから目の前の焼き鳥に手を伸ばした。

「私、婚活イベントで知り合った彼氏と同棲してたんです。その彼が、先日置き手紙だけを残して出てっちゃったんです」

さすがにこの展開は読んでいなかったのか、暮林さんがグラスを持ったまま固まった。

「出てった？」

「はい。置き手紙には別れてくれて書いてあったので、要は私が振られたってことなんでしょうけど……」

「振られた？ 小菅さんが？」

暮林さん、さつきから疑問形ばっかりだ。

私はこっくりと頷いた。

「別れの原因に心当たりはないの」

これまで正面を向いていた暮林さんが、体ごと私の方に向きを変えた。

完全に話を聞く態勢になってる……。さすがに困惑したけど、ここまで話したのだからもういいか、という気になった。

「喧嘩とかはしてなかったたので、最初は理由が分からなかったんです。でも……後になって、思い当たるのがいくつかあって……私、ここ二年くらい仕事が楽しくって、仕事中心の生活になってたんですよ。もちろん彼を忘れたわけではなかったんですけど、彼も仕事で夜はいつも遅いから、完全に生活がすれ違ってしまっただけで、顔合わせない日の方が多いくらいでした」

「気づいたら心もすれ違ってたってことか」

「……ですね。きっと、そういうことだったのかと思います」

自分の行動が招いた結果だと分かっているけれど、はつきりそう言われてしまうと少しだけ胸が痛んだ。

ちらっと暮林さんを見れば、何か考え込んでいるように見える。

暮林さん、私のやけ食いの原因が男絡みだと分かって呆れているんだろうか。そりゃー、そうか。

こんな理由で仕事に支障を来すなんて、情けないことこの上ない。

でも、もう忘れよう。全部忘れて、仕事に生きるのもいいかもしれない……そんなことを考えていると、黙っていた暮林さんが口を開いた。

「……小菅さんは」

「は、はい」

「まだ彼のが好きなの？」

真面目な口調で聞かれて、私はゆっくりと首を横に振る。

好きか嫌いかといえは、もう好きじゃない。

「彼とは……元々、友達みたいな感じで始まったんです。こう、『好きだー！』みたいな熱い感情ではなくて、軽い『好き』みたいな？ 思えば、一緒にいて楽だったから同棲できていたのかもしれませんが……」

「そうか」

暮林さんは静かに話を聞いてくれている。

「漠然と結婚も考えていたので、いなくなったら時はショックでしたけど……今となっては、本当に彼と結婚したかったのかも分からなくなっていて」

「うん」

——そうになると私、大して好きでもない相手のせいで仕事に支障来していることになるな……

「すみません、こんなプライベートなことを引きずって、ご迷惑をおかけして……」

自分で言っただけで落ち込んでしまう。ここで間髪を容れずに暮林さんの声が飛んで

きた。

「いや。別れた後ってそういうものですよ。頭では分かっているけども気持ちを追いつかないっていかさ」

その言葉に思わず彼を見ると、優しく微笑まれた。

「……暮林さんも、そんなことがあるんですか？」

言った後でさすがに元上司に向かって失礼だった、と反省する。そんな私を見て、暮林さんがクスツと笑った。

「そりゃまあ。長く生きていけば、いろいろあるよ」

「あの、じゃあ、どうしたらその気持ちを切り替えられるんでしょう？」

この際だし、今の状況から抜け出すきっかけになれば、と私は暮林さんの方へ身を乗り出した。

「一つあるけど」

静かにそう言った暮林さんに、期待の眼差しを送る。

「なんですか？」

「別の相手と恋愛すること」

予想外の答えに驚き、暮林さんを見たまま固まってしまった。

「どうした？ 俺なんか変なこと言った？」

自分の方を見たまま動かない私に、暮林さんは持ち上げたグラスを再びカウンターに戻した。

「い、いえ……でも、すぐにそんな気にはなれませんよ。それに、相手がいませんし」

本気なのか冗談なのか。彼の本意がいまいち掴めなくて、笑って誤魔化した。

私はそつと暮林さんから視線を逸らし、焼き鳥に手を伸ばす。

「相手ならいるけど」

「はい……？」

何気なく彼を見た時だった。

「小菅さん」

さっきまでと明らかに声のトーンが違う暮林さんが、妖艶な眼差しで私を見つめている。見慣れないその視線に、私は激しく動揺した。

「は、はい？」

「俺と恋愛してみない」

——へ……恋愛？ 暮林さんと？

彼の言ったことが理解できず、私は目をパチパチさせる。

「……暮林さんも冗談を言うんですね」

「冗談を言ってるつもりはまったくくないけど」

そうやって彼は、焼き鳥を取ろうと伸ばしたままだった私の手に、そっと触れた。その行動にも驚いたけど、さっきより彼との距離が近づいていることに気づき、私の顔から作り笑いが消える。

——待って、ちょっと待って。

私は、必死でこの状況を理解しようと試みる。

暮林さんは私に「恋愛しよう」と言った。しかも冗談じゃないって。これは一体どういうことなの。

ものすごい勢いで私の体がカーツと熱くなる。と同時に戸惑いすぎて、視線が定まらない。

「あの、あの。暮林さんは本気で私と恋愛をしたい、と仰る……?」

「うんそう。っていうか仰るって何。おもしろいね小菅さん」

「どうして!？」

思いがけず大きな声を出してしまい、目の前で調理をしていた店主がビクツとなつて私を見た。

「ああっ、すみませんっ」

ペコペコと店主に向かって頭を下げると、横で暮林さんがブツツと嘔き出した。

——くっ、誰のせいだと思つて……!

ムツとして暮林さんを睨む。すると彼は、口元を手の甲で拭いつつ、ごめん、と言つてくれた眼鏡を直した。

「どうしてつて言われてもなあ。俺がそうしたくなつたから、かな」

「したくなつたからつて、そんな簡単に……」

「簡単につてわけでもないんだよね。俺、結構前から小菅さんのこといいと思つてたから」

驚きすぎて、私の喉がひゅつと鳴った。

これまで、暮林さんと仕事で何度か接してきたけど、こんなに喋る彼を見るのは初めてだった。それどころか、いつもの彼と雰囲気全然違うので焦ってしまう。

私はようやく今起きていることは現実なんだと、じわじわと肌で感じ始めていた。

「……そ、それつてつまり、私のことが好きつてことですか?」

「うん、好きだね」

——ええええ……!!

改めて言われるとものすごい破壊力があつた。

だ、だって、仕事がめちゃくちゃできて顧客からの信頼も厚い暮林さんだよ? そんな人が、なんで私みたいなひよっこプランナーを!?

それに私、暮林さんがどういう人なのか、はつきり言つてよく知らない。

悪い人ではないというのは分かる。むしろ憧れている。でも、だからっていきなりお付き合いなんで考えられない。

「君は？俺のことどう思う？」

未だ私の手を掴んだままの彼の手に力がこもる。

「ええっ、どうって……ええと……」

ぐっと身を乗り出し私との距離を詰める暮林さんに、どう返事をしたらいいのかわからなかった。しかも、カウンターの端に座っている私には、逃げ場すらない。

「あ、あの、新入社員の頃から尊敬していますし、すつ、素敵な男性だと思っす……」

テンパりつつ、なんとか言葉を選ぶ。その返事に、暮林さんがにつこりと微笑んだ。

「ありがとう。じゃあ恋愛も問題ないね」

——え——っ!! な、なんでそうなるの!? つていうか、顔が近い近い!!

「ちよつと待って、待ってください!」

どうやってこの場を乗り切ろうか。必死に頭を動かし、私はとりあえず彼に掴まれていた自分の手を思い切って引き抜き、大きく深呼吸をした。

「暮林さん! あの……そう言ってもらえるのはすごく嬉しいんですけど、私、まだ自分恋愛はいいっていうか、どちらかというと今は仕事を頑張りたいというか……」

私の説明を、黙って聞いていた暮林さん。

分かってもらえただろうか、とドキドキしながら彼の次の言葉を待つ。

「うん、大いに頑張つて。君の仕事ぶりにはみんな、期待してる」

穏やかにそう言ってくれた暮林さんにほっと胸を撫で下ろした。

「でもそれはそれ、これはこれ」

「ええっ!?!」

カウンターに軽く肘を付きながら、暮林さんは焦る私に再び妖艶な視線を送ってくる。「これまで公私混同をせず、きっちり仕事をこなしてきた小菅さんだ。今更、恋愛が仕事の邪魔になることもないんじゃない」

「うっ……いやでも、現にこうして周囲にご迷惑をお掛けしていますし……」

「今回は例外。普通何も言わず出て行ったりとか、しないでしょ」

「そうですね……って、そうじゃなくて! 突然すぎて私、何がなんだか……」

思えば元カレともラブな雰囲気は欠片もなく、女として男性から好意を向けられる機会など、すっかりご無沙汰になっていた。それゆえに、突然のこの状況にどう対応していいかわからない。

おまけにさつきから暮林さんの色気が半端ないのだ。本当に隣にいる人物は、さつきまでの暮林さんと同一人物なのか!? と激しく首を傾げなくなる。

頭の処理能力がいよいよ追いつかなくなった私は、両手を上げて暮林さんにギブアップを申し出た。

「あの、お願いですからちよつと待ってください。私もう、いっぱいいっぱい……」  
「君にとって俺は、恋愛対象にはならない？」

暮林さんが苦笑しながら私を見る。

「そつ、そういうことでは決してなく……」

即座に頭を横に振ると、暮林さんは少し寂しそうに目を伏せた。

「それともこんなおじさんはダメかな」

おじさんつて。

「暮林さんはちつともおじさんじゃありません。年より若く見えるし、スタイルだっていいし。彼女がいないことがむしろ謎っていうか……」

「でも君は首を縦に振ってくれない」

これまでの暮林さんつて、どちらかというと穏やかに人の話を聞いてくれる印象だった。なのに今はそんな穏やかさはまったく感じられない。それどころか、私に考える余裕を与えずに、ぐいぐいと答えを迫ってくる。

——どうしよう……どうしたらいいの……

私は内心で頭を抱えた。

「と、とにかく。待ってください。付き合うにしても、まずはお互いのことを知ってからでないと。話はそれからじゃないか、と……思うのですが」

苦肉の策でこう切り出すと、ずつと体をこつちに向けて私を見ていた暮林さんの眉が、ピクッと動いた、ような気がした。

「待てば、良い返事がもらえる？」

カウンターに肘を突き、私を見る暮林さんは、いつもの無口な元上司などではなく、大人の男の人そのもの。私を口説き落とす気満々なその表情にあてられて、なんだか変な汗が流れてくる。

「……わ、私、暮林さんのことほとんど知らないの、今はお付き合いも何も考えられませんか」

なんとか、精一杯のお断りの言葉を口にした。

「なるほど」

私の言葉に、暮林さんが顎に手を当て、何かを考えるような仕草をする。その、顎にかかる彼の手は、指がすらりと長くて美しい。

——あ、指が綺麗……

思わず彼の手に見入っていたら、指だけでなく綺麗な顔がこちらを向いた。

「じゃあ、知ってください」

——ええええっ!?

本当に、この人は私の知っている暮林さんだろうか……笑顔だけど、有無を言わせない圧力を感じる。

そんな暮林さんに、もう一度お断りの言葉を言える勇氣もなく、私はただ頂くことしかできなかつた。

「わ、分かりました……」

暮林さんはいつの間にか注文していた二杯目のウーロン茶が入ったグラスを、綺麗な手で持ち上げ私の前に掲げた。それを見て、私もグラスを持ち上げる。

軽くグラスを合わせた後、ウーロン茶を飲む彼はとても楽しそうに笑った。

まだ困惑の気持ちが抜けないまま、私はあと僅かになったレモンサワーを一気に啣った。

## 二

土曜日の今日。今か今かと待ち焦がれていた物が、ついに配達された。

「ありがとうございます」

「こちらこそありがとうございます!」

爽やかに去る配達員さんを見送って、玄関のドアを閉めた私は、待ちに待った物の入った段ボールをひしと抱き締める。この日を、どれだけ心待ちにしていたことか。

「来たよ——!! 待ってたよ、テレビさんと電子レンジさん!!」

元カレがこの部屋を出て行ってから、一週間ちよつと。

その日のうちに注文しておけば、もっと早く届いていただろう。でも、どうせ新しく買うなら、スペックとかちゃんと調べてから買いたい。そう思ったせいもあって注文を確定するまでに、少し時間がかかってしまったのだ。

電子レンジとテレビを元々あった場所に設置する。テレビの配線を難なくこなし、無事に以前と同じ環境に戻った。ついでに模様替えもして、雰囲気の変わつた部屋に大満足。

設置したばかりのテレビのリモコンを手にはんやりとザッピングしながら、私は昨夜のことを思い出す。

『俺と恋愛してみない?』

まさかあの人にあんなことを言われるなんて。

今でも、あれは本当のことだったのかと首を傾げたくなる。

暮林さん行きつけの焼き鳥屋で、彼から告白された後、何故か話は仕事のことに切り



替わり、普通にお仕事相談をして店を出た。

『あの！ これ私の分です』

店の前で自分が食べた分の代金を渡そうとしたら、その手を掌てのひらで押し返された。  
『誘ったのはこっちだから、お金はいいよ』

『でも……』

『悩みを取り除くはずが、君を困らせてしまったからね。せめてものお詫びだよ』

そう言われてしまうと反論もできず。私は手を引っ込めて、彼に一礼した。

『ごちそうさまでした』

『うん。タクシー呼んだから、それに乗って帰るな』

『え、タクシー!? いいですよ、私、歩いて帰れます』

二杯ほどレモンサワーを飲んだけど、私はそんなにアルコールに弱くない。まだ電車も動いているし、問題なく帰れる。だけど暮林さんは、一歩も引いてくれなかった。

『だめ。こんな遅い時間に一人で夜道を歩かせるわけにはいかない』

——ええ……遅いって、まだ夜の十時くらいですけど!?

でも、私を見る彼の口元は笑ってるけど、目が笑っていない。これは大人しく言うことを聞いた方がよさそうだ。

『分かりました……タクシーで帰ります』

『それでいい』

ここで会話が途切れ、暮林さんが呼んでくれたタクシーを待ちながら、私は必死で何か話題を考える。だけど隣に立つ暮林さんとの距離がかなり近いことに気づき、緊張で体が強張る。

——どうしよう、こんなに距離が近いと、どうしていいか分からない……

『べつに取って食いやしないから、そんなに緊張しないで』

ガチガチの私に気がついた暮林さんが苦笑する。

『だ、誰のせいですか!』

『俺だね。でも、その調子でどんどん俺を意識してくれると嬉しい』

そう言って魅惑の流し目を送ってくるから、私はさらに戸惑うばかり。

『ええええ……!!』

ちよっと、この人本当に私の知る暮林さんなの!? いちいち会話や行動が色っぽいんだけど!!

胸の鼓動が、ドクンドクンと騒ぎ始めた時、私達の前にタクシーが到着した。

その車に近づき素早くドアを開けた暮林さんは、運転手に何か声をかけた後、私に車に乗るよう促す。

『じゃ。今夜は付き合ってくれてありがとう』

『い、いえ、こちらこそ、ありがとうございました』  
慌てて頭を下げる私に微笑み、ドアを閉めてくれた。

なんと暮林さんは、先に運転手さんにタクシー代を渡していたのだ。しかも、わざわざ女性のタクシードライバーさんを指名して呼んでいたと、精算の時に知って驚いたのなんの。

何から何まで、やることがそつない。

ザッピングをやめた私は、座っていたソファアの上に倒れ込んだ。

暮林さんの女性関係の噂とか全然聞かないけど、あれは絶対女慣れしてる。私が思うにかなりの上級者だ。それがなんで、彼氏に逃げられたばかりの私に!? 絶対、無理でしょ……あんな……

昨夜の色気増し増し暮林さんを思い出し、顔から火が出そうになる。

——わーっ、無理、やっぱ無理だよ!! 考えられない!!

結局私は、暮林さんのことばかり考える週末を過ごす羽目になったのだった。

そうして迎えた月曜日。

出勤した私は部署に到着するなり早速暮林さんに遭遇してしまう。彼は私の顔を見ると、眉一つ動かさずに「おはよう」と声をかけてきた。その表情はいつもの暮林さん。

「おっ、はようございます……」

これまでと同じように挨拶をしようとすると声があいさつせずになってしまう。そんな私の反応に、彼の口元がほんの少しだけ緩んだ。そのまま近づいてきた暮林さんは、私の耳元に顔を寄せ、こそっと囁く。

「テレビと電子レンジは届いたの？」

耳から侵入した低い声が、電流のようにビリビリと私の右半身を走り抜けていく。

——うっ！ 何これ、やっぱ……

咄嗟に右耳を手で押さえ、暮林さんを見上げると、にっこりと微笑まれた。

少し熱を帯びた耳を見られたくなくて手で隠しながら、こくこく頷く。

「は……はい。土曜日に届きました」

「そう。よかったね」

そう言っただけで離れた暮林さんが自分の席へ戻っていく。もつと何か言われるのかな、と身構えていた私の予想に反し、いつも通りの雰囲気を感じる。

いきなり微笑みかけられて、思わずドキッとしてしまったけれど、もしかしたら私が気づいてなかっただけで、暮林さんは普段からこうなのかも？

そうだよ、他の社員にもこんな風に接しているかもしれないじゃん？ と考え直す。朝礼を終えた社員がみんな席に着き、それぞれの仕事を開始する。

私は新しい企画書を作成しながら、つい、暮林さんの席の辺りを気にしてしまう。す

## 立ち読みサンプル はここまで